

第1章 四万十川流域の個性

1. はじめに

四万十川流域を全体として理解するための視点を示す上で、まず必要なのが、四万十川という河川とその流域がいかなる個性を有しているか、という考察である。

まず明示しておくべきことは、河川としての四万十川の特質である。流域を個性づける根本は、ほかならぬ四万十川そのものにあるわけだが、これが日本の河川、あるいは四国の河川の中でいかなる位置にあるのかをみておかねばならない。

四万十川流域の文化的景観は、この河川としての特質、そして地形・地質上の特性の上に、人との歴史、文化、生活・生業、流通・往来が重なりあって個性づけられる。ただし、これらの文化的景観を形作る諸要素は、重要文化的景観としての価値評価にすでに示されているように、上・中・下流域でそれぞれ独自のまとまりをもっている。従って、ここではまず、それぞれにまとまりのある上・中・下流域の文化的景観を、流域全体の構造の中に置き、地理的な相互関係を顕在化させることを試みる。

ただし、これだけでは流域内を複数の個別の文化的景観とみなすこととそれほど変わりがない。流域内の各地域の間は四万十川そのものによって繋がってきたはずで、生態系や土地利用などは全体として一つのシステムをなす。同時に、このシステムは歴史的に変化しながらもシステムとして持続してきた。川にかかわるシステムとその歴史的变化は、流域を一つの全体としてとらえる上での核心である。

以上の観点から、本章では四万十川流域全体が持つ個性を概観する。

2. 河川としての四万十川の特質

(1) 四万十川流域の位置

四万十川は、高知県高岡郡津野町の不入山を源流として、高知県西南部を大きく逆S字を描くような流路で幾たびか蛇行を繰り返しながら多くの支流を集め、四万十市で太平洋に注ぐ（図1-1）。幹川流路延長196km（四国第1位）、流域面積2270km²（四国第2位）の一級河川である。広大な流域面積は高知・愛媛の両県にまたがり、関係市町村は高知県側で2市5町1村（四万十市、宿毛市、四万十町、黒潮町、中土佐町、津野町、梼原町、三原村）、愛媛県側が1市2町（宇和島市、松野町、鬼北町）に及ぶ。四万十川に注ぐ支流は30km以上のものが6本、そのほか中小の河川をあわせると、その数は実に319本を数える。

四万十川は、長い流路が中山間地を縫ってゆるやかに流れ出る清流として広く知られるようになったが、一方、暴風雨によって起こる洪水災害においてもわが国屈指の「暴れ川」としてその名を馳せている。ちなみに最近100年間に起きた四万十川の大洪水記録は、実に15回に及び、それに次ぐ中小の洪水に至っては枚挙に遑がない。洪水はまた清流を生み、流域に生きる人々とともに「最後の清流－四万十川」を育んだ。

四万十川は、広い流域面積をもつが、下流域における中村平野を除くと、平地の面積は極めて少ない。

(2) 水系の構成

四万十川本流は、流路延長の長さに比して、源流点から河口までの距離が近く、極端に蛇行を繰り返す河川であるところに特徴がある。また、土佐湾の海岸線に平行するように流れ、中流域にもかかわらず海から8kmの地点に迫る箇所もある。流域に平野部が極端に少ないことも指摘される。以下、本流・支流各々につき、詳しくみていく。

A 本流

四万十川本流の源流点は、高知県高岡郡津野町の不入山（標高1,336m）の東斜面の標高約1,200m付近とされている。この不入山からすぐ下流の津野町船戸から四万十帯に入り、流れを東や西に変えながら次第に大きな蛇行を繰り返すようになる。

高岡郡中土佐町に入り、流れを東や西に変えながら次第に大きな蛇行を繰り返すようになる。その後大小の支流を集めて四万十町の高南台地（窪川盆地）に入る。ここで四万十川は海岸線まで直線で8kmというところまで近づくが、南東に連なる火打ヶ森から五在所ノ峯にかけての山地（以下、火打ヶ森・五在所ノ峯山地）に阻まれ、四万十町窪川付近で流れを西に向け内陸側へ流れる。高南台地は谷底平野で、広い平坦面は流域の中では貴重な存在である。高南台地を抜けるとふたたび山地の間を縫うような流れとなり、大蛇行を繰り返しながら西流する。途中、四万十町大正で流域第一の支流である椿原川と

合流する。ここまで四万十川は松葉川とも呼ばれ、その流れは約90kmにも達し、本流全川の2分の1近くを占めている。平坦な土地は蛇行部や支流との合流点に土砂が堆積した低地が主で、川沿いに連続することなく点々と形成されている。また蛇行部が切断された環状蛇行跡の地形もみられる。

大蛇行を繰り返しながら西流する四万十川は、四万十市江川崎付近で再度宇和海まで直線で 20km ほどに近付くが、そこでまた流れを 90 度曲げてふたたび南に転じ、四万十市西土佐地域では西土佐江川崎で支流の広見川と、西土佐津野川で目黒川、さらに西土佐口屋内で黒尊川と合流するなどしつつ、河口から約 13km 上流の佐田付近まで蛇行を繰り返しながら山間を流れる。この間、川幅や水量は増し、勾配もさらに緩くなるため環状蛇行跡の形成が見られないが、河原や河床には岩場が少なくなり、川砂利が堆積するようになる。

四万十川は四万十市三里付近から南東に流れを転

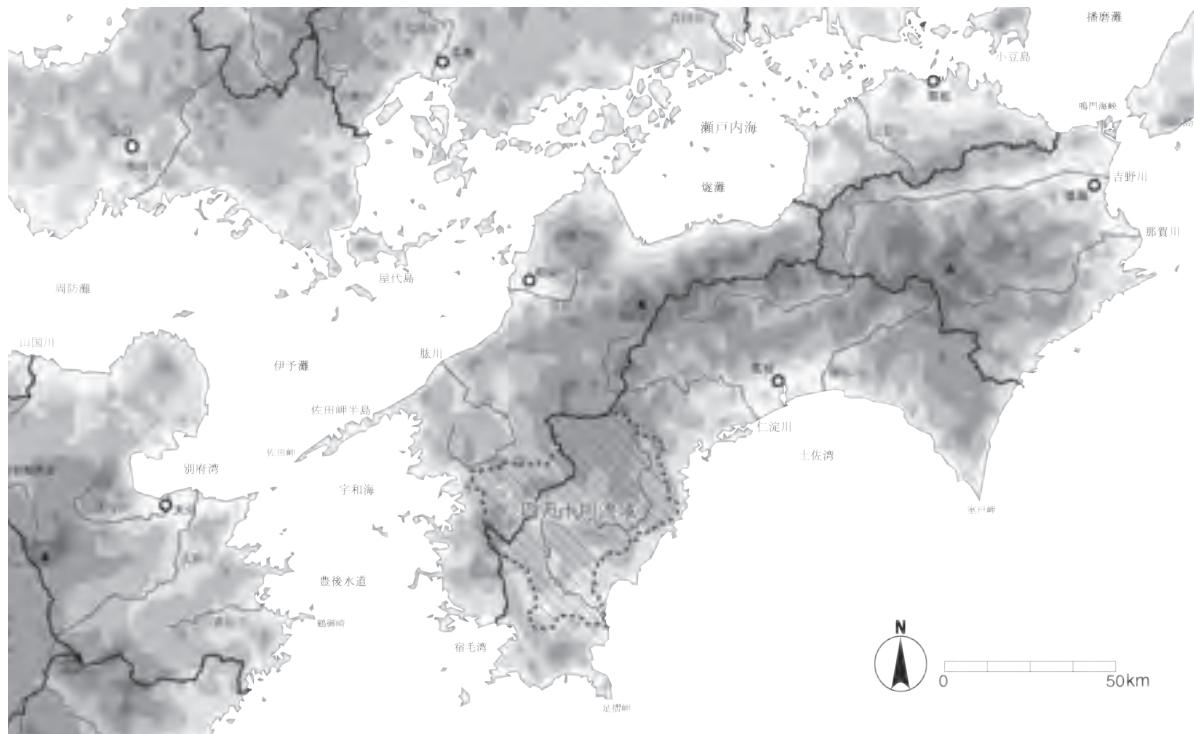


図1-1 四万十川流域の位置

じ、四万十市佐田から中村平野に入る。中村平野では市街地付近で後川を、さらに、下流の河口付近で中筋川を合わせ、四万十市下田において土佐湾に流れ込む。平野と呼べる場所は佐田から河口である下田までの13kmほどの区間の両岸で、狭長に展開する沖積低地である。流域面積に比べて平野部が非常に小さいことも四万十川の大きな特徴である。また河口域は平坦な地形のため広大な汽水域となる。汽水域の範囲は季節によってあるいは支流の後川や中筋川からの淡水の流入量によってかなり変化するが、満潮時で9.5kmまで塩水があがることがある。

汽水域には四万十川の幻の魚と呼ばれるアカメをはじめ多くの生き物が生息する。また全国生産の約7割を占める天然スジアオノリの生産や仔稚魚の生育場となっているコアマモ群落の分布もこの水域である。

B 支流

梼原川 流域面積451km²、幹川流路68km、四万十川流域最大の支流である。高知・愛媛両県境の津野町五段城（標高1,456m）の標高1,330mに源を発し、梼原町梼原の下流で2次支川である四万川川と、同町中平で北川川を合わせて南流し、四万十町田野々で四万十川に合流する。上流の流れは直線的で、四万十川とは違う様相を呈している。一方、四万川川合流点付近から下道ダム付近までの流路では屈曲した峡谷状の穿入蛇行が著しい。

広見川 流域面積367km²、幹川流路68km、梼原川に次ぐ規模の支流である。愛媛県鬼北町の地蔵山（標高1,128m）の標高1,100m地点を源にし、大部分が愛媛県側を流れている支流である。広見川のさらに支流の成川渓谷は足摺宇和海国立公園に属しており、自然林を残している。

目黒川 流域面積98.4km²、幹川流路28km。愛媛県宇和島市三本杭（標高1,226m）の標高1,170mに源を発する。大きく曲流した後に東流する谷は花崗岩でできた巨石や奇石が露出しており、滑床渓谷と呼ばれている。北宇和郡松野町に入って南東に流

れを転じ、四万十市西土佐津野川で本川に合流する。

黒尊川 流域面積75km²、幹川流路31km。目黒川と同じく三本杭を源流とするが、黒尊川はその源を四万十市側の標高1,100m地点としている。目黒川にはほぼ平行して流れ出る。源流部の国有林はそのほとんどが人工林化しているが、唯一原生林として残存する黒尊山自然観察教育林は、シイ・カシ林からブナ林へと垂直分布の変化が見られる貴重な自然林で、四国に分布するブナの最西南限地にもなっている。

後川 流域面積200.9km²、幹川流路31.8km、四万十川の下流部の東側に位置する一級河川である。四万十市の東端に近い仏が森（標高687m）の標高620mに源を発して東流する。下流部で2次支川である内川川と岩田川を合わせた後、河口上流約6km付近で本川に合流する。後川は大水のたびに氾濫を起こし、下流に居住する四万十市民を苦しめてきたが、それと同時に泥土の堆積により肥沃な平地も形成した。

中筋川 流域面積144.3km²、幹川流路36.4km、四万十川下流部の右岸に位置する一級河川である。宿毛市白皇山（標高458m）の標高430mに源を発して東流し、四万十市の渡川大橋付近から本川沿いに進み、河口から4kmの地点で本川に合流する。四万十市と宿毛市にある平地は、土地の高度利用が進み、それと平行して治水対策も行われている。

（3）河床勾配と河道形態

四万十川の河床勾配を日本の他の河川と比較すると、勾配の変曲点が明瞭で、かつ流路延長196km中、河口から180kmまで勾配が緩く、緩勾配部が極端に長い点に特徴が見られる（図1-2）。このため本流では、中流域にあたる四万十町の野地まで、支流の梼原川では中流の梼原町島中まで、センビと呼ばれる川舟が就航できるほど、河床勾配がゆるやかであった。この特質はまた、四万十川流域にダム建設の適地がないことにも繋がり、本流には河川法で

規定されているダム（堤高15m以上のもの）が建設されなかった。これは四万十川流域の生態系や水質保全の上で極めて重要な特徴といえる。

四万十川のもうひとつの特徴として、「穿入蛇行」が挙げられる（図1-3、第4章3参照）。沖積平野上で河川流路が洪水などにより様々に変化する蛇行のことを自由蛇行と呼ぶのに対し、山間部を大きくS字を連ねたように屈曲する蛇行を穿入蛇行と呼ぶ。四万十川の穿入蛇行は仏像構造線以南の四万十帯で広く見られ、上流から下流にかけての山地や丘陵地などに発達している。河川は屈曲する深く狭い侵食谷を形成し、氾濫原は見られない。特に中流域でその典型的な姿を見ることができる。

（4）水系の特質

四万十川の水系の特徴は、上流域から既に始まる緩い勾配と山間の蛇行、海岸線まで近づきながらもまた山間へと引きもどされる流れにあるといえる。勾配が緩くゆったりとした流れを呈するのは穿入蛇行により流路が長くなることが理由であるように、これらの特徴は個別に存在しているのではなくお互いに関係性を持って成り立っている。

一方で、水系は明らかに上・中・下流の3区間に区分される。

上流は、緩い斜面が連続しその間を直線的に河川

が流れ、津野町と梼原町の北半分が該当する。中流は、山間をゆったりと大蛇行しながら流れる区間で、東西が海岸線に接近し、途中、谷底平野も見られる。津野町と梼原町の南半分、中土佐町、四万十町、四万十市の北側が相当する。下流は四万十市の中村平野部分に当たり、流路延長に比べて区間は非常に短い。

このように見てみると、四万十川水系は流れ方そのものもその流れによって生み出される上・中・下流の区間特性も特異な流域といえる。

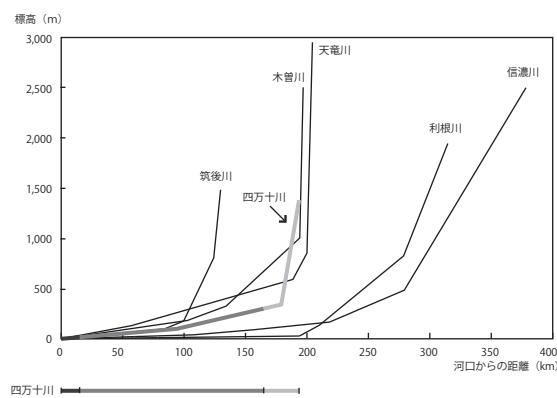


図1-2 全国主要河川と四万十川の河川勾配



図1-3 穿入蛇行（四万十町上秋丸）

3. 上・中・下流域を分けるもの

水系にみられる上・中・下流の区分は、自然条件だけでなく、各流域における人々の生活・生業やその経てきた歴史に至るまで通底している。流域を3つのまとまりに区分する背景を、地域個別にではなく、全体を見通した視点から列挙することで、まずは上・中・下流域それぞれのまとまりを、相互の関係においてとらえる枠組みの提示を試みる。より詳しくは、第2章で個別に論じていく。

(1) 流域を分断する地形・地質

四万十川の特徴的な水系をつくり出す大本となるのが、流域の地形と地質である。

四万十川流域の位置する外帶（中央構造線の南側）は、度重なる造山運動によって形成された山地部分が大部分を占め、平野は河口部にわずかにみられるのみである。

地質的に見ると、梼原町から津野町にかけて町の中心を東西に走っている仏像構造線によって南北に大きく分けられる。北は、秩父帯に属し、左横すべりの断層が多く走る破碎帶地すべり地帯である。

南は、プレートテクトニクスにより生成された比較的新しい四万十帯が占め、地すべり災害が少ない。隆起した四万十帯が火打ヶ森・五在所ノ峯山地を形成し、行き場を失った四万十川の流れが高南台地の広い平坦面をつくりだした。さらに高南台地以西では、この隆起により、自由蛇行をしていた川が侵食基準面の低下に伴って回春し、蛇行流路に沿って基盤岩を深く掘り込んだ結果、前述の穿入蛇行する河川となっている。

四万十川下流域では、同じく四万十帯ながら、中筋川地溝帯に接し、縄文海進期以降に沖積化が進んだため、砂や礫、泥から成る低地及び丘陵地で占められる。

こうした地形・地質と、四万十川の流れがあいまって、四万十川の流域は、上・中・下流域の3つの領

域に区分される。

(2) 各流域を個性付ける歴史と生活・生業

上・中・下流域における人々の生活・生業のあり方は、こうした自然条件に加え、各々の歴史的背景に従って個性付けられてきた。

上流域では、秩父帯の緩やかな斜面地や谷底平野を利用して棚田を築き、その奥の山林では林業が盛んに行われている。茶生産、果樹栽培も盛んで、いずれも秩父帯の斜面地が巧みに利用されている。

この上流域一帯は津野山地域と呼ばれ、延喜13(913)年、京都より藤原經高（後の津野經高）が入国し津野庄を築いて以来、慶長5(1600)年までの約700年間津野氏の所領となった場所である。その後も江戸時代まで津野山8ヶ村でくらべて独自の生活文化圏が生まれた。

中流域の内、高南台地では四万十川の流れが安定するため、本流に直接堰を築いて農地に水を配ることができる。そこでは仁井田米やショウガの栽培が盛んにおこなわれる。高南台地以西に広がる山間部では、蛇行部内側緩斜面や支流との合流点、また環状蛇行跡に集落が形成され、地形的変化を土地利用に適用している。

この一帯では、伊予文化の影響を見ることができる。その顕著な例が神祭での牛鬼と鹿踊りで、梼原町から四万十町西部、四万十市北部にかけての祭りに見られる。

下流の中村平野では四万十川本流や後川、中筋川沿いの氾濫原で稲作がおこなわれている。下流ならではの低湿地や砂質土壤、汽水域を利用して、ナシやラッキョウの栽培、スジアオノリの収穫やヒトエグサの養殖が盛んにおこなわれている。

中村は、応仁の乱以降100年にわたり一条氏によって治められた地であり、京風の文化が根付いている。下田港を介して、幡多地域の豊かな森林資源を積み出し、あるいは対明貿易も発展させた。

以上、四万十川流域の各地域における人々の生活・

生業は、自然条件による区分に対応するように、基本的には別個の文化・生活圏をなしている。

（3）河川の軸を横断する流通・往来

一般的に、物資の流通や人々の往来は流域の上流と下流とが結ばれて成り立つ。しかし、四万十川流域の場合、上・中・下流域の間に四万十帯の山塊が横たわっているため行き来が非常に困難である。対して、上・中流域における東西分水嶺の起伏は穏やかで、峠越えが容易である。東は久礼や須崎など土佐湾に面する港に近く、西は宇和島や大洲といった愛媛県側の拠点に近いという地理的特質を持つ。

そのため、上流域では、秩父帯と四万十帯との間の断層である仏像構造線に沿って東西に抜ける（横断する）ように梼原街道が通り、高知－須崎－【東津野・梼原】－宇和島・大洲というネットワークで結ばれてきた。峠を越えての盛んな流通・往来は、祭祀及び接待・宿所の機能が複合する茶堂の建立も進めた（第4章1参照）。

中流域では、東から西に向かって流れる四万十川に沿って、高知－久礼－【窪川・田野々・十和・江川崎】－宇和島という交通が開かれた。藩政期には、高南台地で生産された藩米は、志和や興津に設けられた米蔵へ運ばれ、そこから高知へと積み出された。明治期以降、中流域の支流奥では国有林野の開発が活発に行われ、森林軌道によってあるいは久礼へ、あるいは四万十川の水運を利用して河口・下田港へと運ばれた（第4章4参照）。

下流域にはまた独自の交通が発達した。高知から窪川を経て中村に至る陸路はもちろんのこと、下田港を拠点とする海上交通が大きな役割を担ってきた。

流域の各地域における交通を、河川の流れと対比すると、いわば河川の軸に対して横断するような方向に発達してきているといえる。従って、ここでも上・中・下流域は各々独立したまとまりを有することになる。

4. 流域全体をまとめるもの

（1）流域を通底するシステム

流域は上・中・下流で個別のまとまりを持つが、四万十川そのものが流域を貫いている限り、相互に関連を有するはずである。

まず指摘すべきは、四万十川を通じた生態系の連鎖である。流域の83%を占める森林では栄養分豊富な土壌がつくられ、そこに降った雨が養分を川へと送りだす。このミネラルに富んだ水で藻が育ち、昆虫や魚類のエサとなってきたこと、また上流まで勾配が緩くダム建設が行われなかつたことが、生息魚類数185種と全国一を誇る四万十川の環境を生んだ。

山と川とが有機的に結びついた関係は、人々の生業にも連鎖を及ぼす。山と川の有機的関連に起因する魚種の多さと漁業資源の豊さにより、流域では上流から下流まで多様な漁法が見られる。また、この流域の広大な林野で中世から行われている林業についてみれば、その積出港としての機能をもった河口の下田は、奥山の豊かな森林資源と穏やかな流れの四万十川を背景に成立した場所といえ、川を介してダイナミックに結ばれてきた流域内の関係を読み取ることができる。四万十川流域は山－川－海が循環しながら何らかの形でお互いを支え合い、影響しあう関係にあるといえる。

また見方を変えると、四万十川流域では上・中・下流域のまとまりの中に類似の構造が見られる。河口の下田は四万十川を介して高南台地以西の林産物により発展し、中流域に近い久礼は高南台地一帯の林野から林産物が陸路で運ばれて発展した。山と港との組み合わせは、相似の関係にある。

まとまりの類似性は、文化面でも、流通・往来面でも見られる。上流域の津野山文化と下流域の一条文化はどちらも京都に源をもち、中世に花開いたもので、流域一体に中世的な要素を残すことにつながった。また、陸路での流通・往来のルートは上・

中・下流それぞれ東西方向に並列するようになつた。このことが、東西方向の結びつきが強い四万十川流域の特性を生んでいる。

(2) システムの連鎖的変化

流域全体に通底するこうしたシステムによって流域内の各領域が相互に関係を持つのに加え、流域の生活・生業や交通体系が時間的に変化する場面においても、相互の関係は明瞭に見えてくる。上・中・下流それぞれにおける生活・生業、交通体系の変化は、相互に連鎖するように起こってきた。詳しくは第3章に述べるとして、ここでは近代における林業の活況と陸上交通の発達について触れておこう。

中流域から始まった近代林業は、新たな町場の発

生や、町内の構造の変移を連鎖的に促した。天然林切り出しのために敷設された森林軌道により、その終点に設けられた土場や筏・川舟の中継地には人家や商店が集まり、流域林産物の積出港となった下田や久礼は大きく発展した。下田では、町の中心がかつての中心からより海に近い水戸へと推移していく。

林業の大規模化は、交通の変化と相俟って、四万十川の風景を変えていく。林業の発達で天然林が消失し、昭和初期に陸上輸送が発達していくことで、森林軌道や水運、馬橇など輸送手段が順次廃止され、昭和30年代半ばにはトラック輸送へと完全に移り変わった。交通網の変化に伴い軌道跡は車道として整備され、渡し舟で川を渡った箇所には沈下橋が架けられた。筏や荷舟の通行が無くなったこと

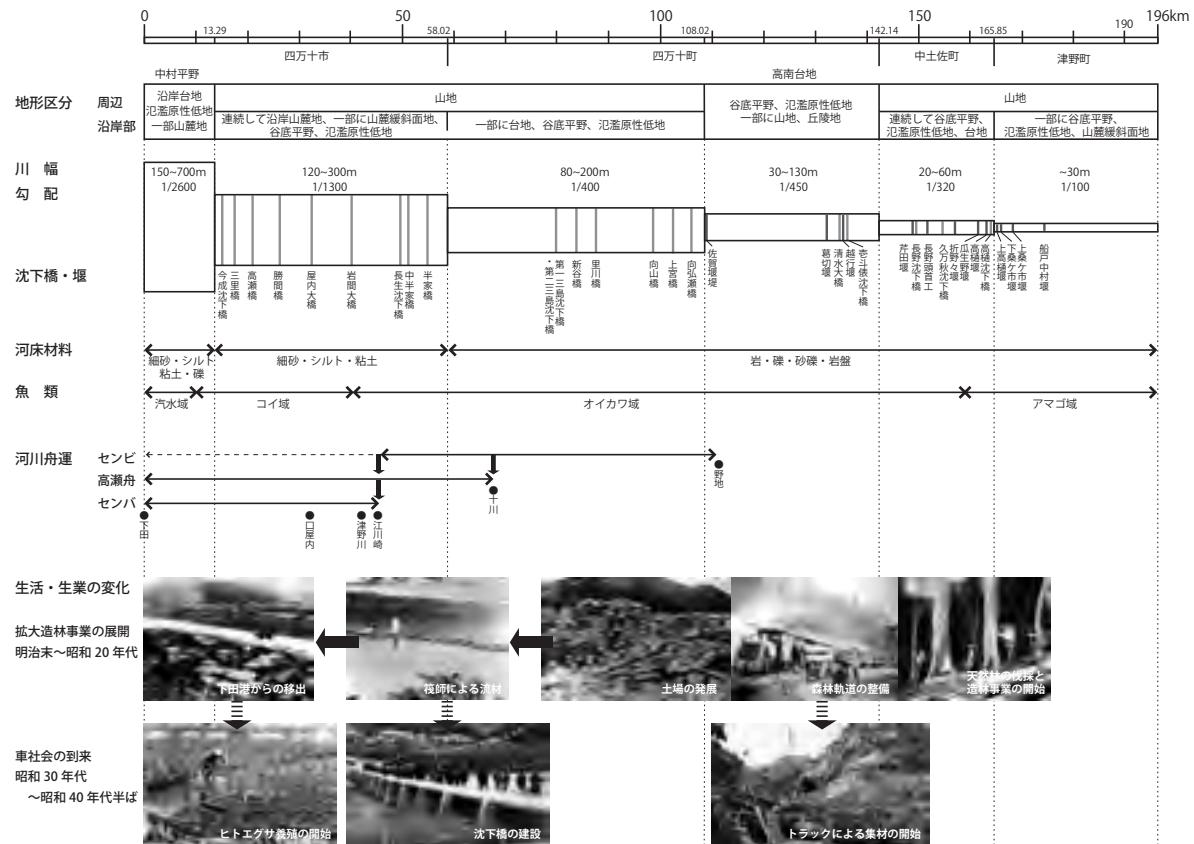


図1-4 四万十川流域の区域特性と流域の変化

が沈下橋の架橋を可能にしたともいえるだろう。

中流域の高南台地では、堰の形態が交通の変化と連動して移り変わっている。水運が行わっていた時代の堰は筏や川舟が通れるように木材と石を利用して農繁期だけの仮設のものとして作られていたが、陸上交通網の整備や戦後の耕地整理と土地改良の推進により、常設のコンクリート製のものへと変化した。

四万十川流域という広域にわたる文化的景観をとらえる上で、こうした変化のプロセスを見ることは、流域全体の持つ一体性を読み解く重要な鍵となる。四万十川流域における変化のプロセスは、上・中・下流域に連鎖的関連性を浮かび上がらせる。

5. 四万十川流域全体の個性

四万十川流域は広域にわたるため、自然条件に応じて地域的なまとまりが生じる。これは当然のことである。それでもなお、全体を見通してみたとき、四万十川流域にはいかなる個性があり、それはいかなる背景によって成り立っているのだろうか。本章のまとめとして、以上の内容を以下の3点に集約しておきたい。

① 地形・地質を基礎に考えると、四万十川流域は、明らかに上・中・下流域に区分される。ただ、同時に、四万十川流域の地形は、川に対して横断的な交通の発達をうながした。その結果、上・中・下流域は、それぞれに別個のまとまりを有しながらも、相似形を描くような生活圏を作り出している。

② 緩勾配の区域が長距離に渡る水系上の特質ゆえに、生態系の連続性と河川交通の及ぶ範囲が広域にわたっている。それゆえに、上・中・下流域は、直接的な連関を必ずしも持たなくとも、間接的に結ばれてきた。

③ この間接的な関連性は、生活・生業に大きな変化が訪れたとき、顕在化する。変化のプロセスを流域全体で見たとき、上・中・下流域間に連鎖的な変化が起こることが見て取れる。

附・「四万十川流域の文化的景観」全覧図

本章に記した観点を基に、四万十川流域全体を視覚的にとらえるイラストを「『四万十川流域の文化的景観』全覧図」として作成した（図1-5）。広域に及ぶ文化的景観を理解するための一つの方法として試みるものである。

四万十川流域は、棚田や茶畠、沈下橋や茶堂、森林軌道の跡、牛鬼や火振り漁といったように、有形無形の要素が無数に集まり、まるで地上の天の川のように見える。一見すると、ただの星々の集まりのようにしか見えないかもしれないが、この全覧図を見てみると、四万十川流域をひとつにまとめるものの存在が、その背後にどっしりと構えていることに気づくだろう。つまり、上流域の秩父帯と中・下流域の四万十帯での地形の違い、山間でひたすらに繰り返される蛇行、土佐湾や宇和海まで近づきながらも阻まれてまた内陸へと向かう流れ、それを巧みに利用して流域内で結び付いた人や生き物の行き来、こうした四万十川流域の文化的景観の個性をつくったのは、地形や地質、水系といった流域のフィジオトープである。

例えば、上流域では、秩父帯の入り組んだ谷と緩い斜面地をいかして棚田や茶園の造成が進み、地域を支える生業となっている。また、仏像構造線に沿うように梼原街道が上流域を通り抜け、人々の暮らしが歴史的にも伊予や高知と直結して成り立ってきた。中流域では、四万十帯の隆起により形成された高南台地で仁井田米が生産されている。かつては土佐藩の重要な穀倉地帯で、ここで生産される藩米は火打ヶ森・五在所ノ峯山地を越えて志和や興津の米蔵へ運ばれていた。高南台地以西では、四万十川や梼原川が山間を大きく蛇行しながら流れ、江川崎辺りまでは岩場を伴う流れが続く。河川沿いには居住可能な平地は極わずかで、大井川や下津井のように馬蹄型の蛇行跡を利用した集落が多い。

このように、四万十川流域は地域的なまとまりで区分されることにひとつの特徴を持つが、それとともに、このフィジオトープの特性は流域を決して単なる寄せ集めのものにはしてこなかった。

四万十帯の深い奥山では近代に入り国有林野事業が活発に展開され、大正中津川や黒尊などの国有林からは四万十川沿いまで森林軌道が敷設された。搬出された林産物は筏や川舟で河口の下田まで流され、下田では街場が砂州上へと広がった。戦後、陸上輸送網の整備に伴い森林軌道は道路へと姿を変え、筏や川舟の運航が無くなった河川には沈下橋が架けられるようになり、現在では川漁や川遊びの拠点となっている。中継地の集落では灌漑事業により水田化が進み、積出港だった久礼はカツオ一本釣り漁船の基地へ、四万十川河口の下田では広大な汽水域を活かした新たな生業としてスジアオノリの養殖業がおこなわれている。

現在見る四万十川流域の景観は、様々な構成要素が雑多に集まる集合体としてとらえられがちである。しかしその一方で、上流の山林からの豊かな有機物が中・下流域での伝統漁法の継承に繋がっていたり、水運を通じて山と中継地と積出港が結ばれていたりと、上・中・下流域は直接的な関係というよりも、むしろ間接的な関係で結ばれてきた。さらに、時代の大きな転換点を迎えた時、「連鎖」という仕組みを織り込みながら、流域が一体的に変化する関係が築かれてきた。

この関係は、現在の四万十川流域のそこかしこで景観となってあらわれるが、一見しただけではひとつひとつの星がただ散りばめられているようにしか見えない。しかしその星々を繋ぐ見方を文化的景観という視点から提示することで、星々が星座となり、さらにその星座同士が紡がれてひとつの神話を成すように、間接的な関係で結ばれた一体としての四万十川流域の価値が見えてくるだろう。





図1-5 「四万十川流域の文化的景観」全観図